＜資料＞

2019 年度教職相談活動報告

片山敬子

はじめに

今年度は、昨年３月から教職相談に訪れる学生がある一方で、５月の中旬から相談開始の学生もあり教員採用試験に向かう４年生の取り掛かりや方法など、学生個々の取り組み姿勢に個人差を感じつつ、本人の教職に対する思いや考え方を聞く中で相談活動を行ってきた。昨年度の反省を生かし、教職への道筋をより具体的にイメージできるように、年度当初から３年生にロードマップ作りを求めたり、教員採用試験までの準備の仕方等について直接４年生から話を聞く機会を設定したりした。今後もさらに学生が自己を見つめ将来に向かう可能性を広げていけるよう相談活動の充実に努めていきたい。

１　相談概要

相談の主な内容は、４年生の教員採用試験に関する相談がほとんどであるが、中には自らの教職への適性に疑問を感じる学生や教職免許を複数取得する中で自分を生かせる校種の選択に迷いをもつ学生の相談もあった。「働き方改革」が叫ばれ、教員の超過勤務時間の長さに学校が「公的ブラック企業」とまで言われる中で、一年後の自分の姿を想像した時、「やっていけるだろうか。」という不安を抱く学生が少なからずあったのも特徴的であった。また、３年生では教育実習に向かう前に、３年生のうちに学校の雰囲気を知り、先生方の姿勢を学び、さらには児童生徒と教員の関わり方、指導の方法等を直接学びたいという学生も出現した。４年生が感じた４月から学校現場という現実に直面する不安、そして４年生を見据え３年生に芽生えた教育実習に備えたいという独自の学びの意欲、学生が自分の一年後をどう捉え、「今の自分」を「将来めざす自分」にどうつないでいくのか、不安を払拭し迷いや葛藤を乗り越えて教職の道を突き進もうとする姿は、これからの「学び続ける教師」の原点となり原動力となっていくものと考えている。

２　教員採用試験に向けての取り組み

相談活動を行う中で、受験する校種や現状における問題点など学生のニーズに合わせて行っていった。学生は個々に自らが受験する地域の試験内容を把握しており、筆記試験については、その出題傾向等を参考にしながら自分のペースで取り組みを進めていった。その進捗管理については各自に任せ、各教委に共通した重点事項、最近の教育時事問題や教育課題等に関する資料等を参考として配布した。また、今年度教員採用試験の一次試験、二次試験内容が多様化し、即戦力を吟味する方法として個人面接・集団面接・集団討議に加えて模擬授業、場面指導、ロールプレイ、グループワーク等、個人の実際場面での力量を問う形態や集団の中で他と協力して課題解決に取り組む協調性や統率力をみる形態も増えてきている。そのため、実際に模擬授業を行ったり、指導場面を設定して即座に対応を考えたりと、学校現場を想定しての瞬間的な

判断を行うということ。そこには必ず、問題点・課題点を的確にキャッチし、明確な根拠を持った公正な判断力が求められていく。教育実習の経験のみに限られた学生にとっては、試行を重ねていきながら自分が感じたこと、考えたことを一つずつ自分の中に落とし込んでいく以外に方法はない。さらに、小論文に至っては、思考力や表現力が問われ、自分の考えを論理的に伝えていく力が試され、過去問にひたすら地道に粘り強く取り組んでいった。

３　「学び・遊び・つなぐ」プロジェクトのコーディネイト

今年度の本プロジェクトでは、従来の「学びの教室」５コマ、「つなぐ教室」４コマ、「遊びの教室」１コマ、「つなぐパネル」２コマ、「つなぐ座談会」１コマに加えて、「学びの座談会」１コマを行った。合計１４コマの参加人数の総数はのべ８８０名に上った。

このプロジェクトは、特色ある教員養成の在り方として、めざす教師像「自分を高めることができる」「国際的な視野をもつ」「授業がおもしろい」「創造的な授業ができる」「他校種と協働できる」の５つを掲げ現職教員等を講師として開催してきており、実際に参加者は教員採用を目指す学生ばかりでなく、民間に就職あるいは大学院への進学・在学の学生・大学院で学ぶ現職教員も含まれている。それらは教員として今日までの成長過程の中で培われた教師論であったり、在外教育施設で直面した異文化理解や海外協力隊での未知の世界で格闘した経験であったり、さらには今日的な課題に対して、教員とは異なる立場からアプローチし、解決への糸口をどう見つけ出すのか新たな視点からの斬新な迫り方であったりもする。まさに、そこには教職という枠を超えた魅力ある挑戦や創造的な思考が学生たちの心に多くのメッセージやインスピレーションを伝えているように感じている。参加対象の学年を限定していないため、感想に目を通す限り様々な意見が出てきてはいるものの、自分の「これから」にどう活かしていこうとするのか、学びを「自分なりに」積極的な姿勢に転化していこうとする考え方は、今後の人生の選択をバックアップする原動力になるかもしれない。

そして、参加する学生の側のみならず、講義を行っていただいた講師の先生側にも確かな学びが存在している。最初は手探り状態で少し緊張されていたが、役割を終えると安堵感と充実感からかとても爽やかな表情になられた講師もおられた。しばらくして、学生の感想文を送付すると殊の外感謝された。また、心配が杞憂に終わり大きな自信につなげられたのか、講義の前後でその先生の印象さえ変わったケースもあった。広く捉えれば双方にとっての好循環であり、相互に成長へのヒントや自己再発見の場となったのかもしれない。

４　成果と課題

○　今年度の４年生は前年度３年生の３月から関わることのできた学生も多く、私としては昨年度よりは若干早く学生を知ることができ、学生個々の実態把握に努めることができた。４年生、特に地域学部は学年内でのつながりが比較的強く、全員は無理でも情報を流したり、吸い上げたりという面で有効な状況にあった。教職の面接指導においても意図的に連絡を取り、学生間に動きを作ることも容易にできた。そういう面で、４年生が中心となり、３年生に教員採用試験について直接経験談を話し、参考にしてもらおうという企画は面白い取り組みだった。３年生の参加者は少なかったが、４年生はそれぞれにスライドを準備し、経験をもとに要点を明確に伝えていた。３年生へ向けた企画に参加学生は満足していたが、教採で関わってきた私としては、４年生の成長ぶりがとても頼もしく見えた。

○　４年生への相談業務は10月頃まででほぼ終わり、後期は３年生をと考えながら、春から布石を打ってきたつもりであったが、相変わらず４年生にならないと動き出さないのか、もうすでに深い所を潜行しているのか現状では把握は難しい。ただ、数件ではあるが主体的な動きがある。先ずは特別支援学校への見学、自分の適性を知るためにも実際の学校での様子を学びたいという３年生。次に高等学校での教育実習に対しての事前学習を希望、自らが担当する学科の教科内容や生徒の学習内容を学び､実習につなげたいという３年生。そして、さらに教育関係の公務員を希望、実務を担当している方の話を直接聞いて参考にしたいという１年生。できることにはどんどん挑戦させ、たとえ失敗しても推進力を失わないたくましさを身につけさせたい。教職をめざしても、めざさなくても人として豊かな経験は豊かな心を育む。多様化そして共生の時代。自分の可能性への挑戦を求め続ける教師像を追求させたい。

片山敬子（鳥取大学教員養成センター）